

# 米国姉妹都市を姉妹都市協会・高校生が訪問

## ラシン市とデイトン市を訪問

8月2日から9日までの日程で町姉妹都市協会役員5人が姉妹都市提携30周年を記念してウィスコンシン州ラシン市とオハイオ州デイトン市(同44周年)を訪問しました。両市は約30年に渡る高校生派遣の受入れなど多大な貢献をしてくださっています。

今回の訪問では役員が、両市長、両市民の方々へ、黒岩県知事から託された感謝状と中崎町長の手紙を記念品とともに贈り、直接感謝の気持ちを伝え、両市との親交の絆をさらに深めて帰りました。



写真左 黒岩県知事から感謝状を託される中崎町長  
写真右 デイトン市長に町からの記念品を手渡す  
新宅姉妹都市協会会長



## 高校生派遣レポート

町姉妹都市協会から派遣された町内在住の高校生4人が7月24日から2週間、ラシン市を訪問し、ホームステイをしながら市民との交流を深めました。貴重な体験をされた高校生たちのレポートをご紹介します。

◀左から清水さん、ラシン市長、中村さん、横地さん、坂本さん(ラシン市にて) ◎問い合わせ 総務課 ☎内線 211

## 「得難い体験」

清水 風花

今回の姉妹都市交流で、私は私自身では出来ない事を沢山経験しました。

生活様式、同世代の違い、市の人々の人柄、気候、景色など。私が見てきたことは書ききれないほどあります。その中で最も印象的だったのは、私のホストファミリーが教師だったこともあり、「学びの場」に多く触れたことです。

その一つ、サマースクールのアシスタントをさせてもらいました。4日間6回の授業、理科教室4回と日本文化教室2回、博物館を借りて開講しました。

文化教室は児童向けで、図画工作を中心に「日本国旗の風揚げ作成」、「鯉のぼり作成とその意味」、「箸の使い方」、「自分の名前の日本語表記」を教えました。教える立場に慣れませんでした。が、とても新鮮で、授業を楽しんでもらえたことが忘れられません。

理科教室では主に補助をしました。小学校高学年向けの授業で「Spy science」をテーマに子どもたちと勉強しました。

このサマースクールによって、子どもたちとその家族と交流を深め、とても多くの方々を知り合いになることが出来ました。ホームステイも経験することが出来て、更にこのような貴重な体験が出来、喜びと感謝でいっぱいです。私にとって別世界を見たような色濃い二週間でした。

## 「大きな世界を小さく」

中村 匠吾

タイトルの言葉は、ラシン市長が私達におっしゃったものです。市長はインターアクト等の国際交流/親善活動を重視されており、私は市長の「ラシン市は一万キロ以上離れている大磯町と、更には世界中の様々な都市とも繋がる事が出来る」という自信に満ちた言葉に感銘を受けました。

今回、私は多種多様な人々と出会いました。

まず、私がお世話になったホストファミリーはベジタリアンで、日々の食事には魚や肉は勿論、卵や牛乳、油も全く使用せず、化学調味料さえも敬遠していました。そしてその食生活を楽しみ、誇りにしていました。

米国では「肥満」が社会問題になっていますが、この家庭は、食生活を徹底的に自己管理することで家族が健康に暮らし、それが国や地域への貢献につながるという考えを持っています。

また、今回出会った他の方々の生活も、それぞれが横並びではなく、良い意味で個性的であり、皆が生き生きと暮らしていることをとても興味深く感じました。

最後になりましたが、この交流事業を支えてくださった皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

私達が故郷「大磯町」と姉妹都市「ラシン市」との国際交流に少しでも貢献できたならば大変光栄です。



## 「友情の輪のはじまり」

横地 望

私がラシンで得た一番大きなものは、友情です。

ホストファミリーを通じ、ホストシスターの友人やボーイフレンドなど、たくさんの人と出会いました。彼らと動物園、美術館、遊園地などに行って仲良くなったのはもちろん、日本文化を積極的に紹介したことが友情を深めるきっかけになりました。

最初は「日本の姉妹都市の学生」という肩書きで自己紹介が済んでしまうことに少し甘えてしまいました。それでは自分が来た意味が何なのかかわからず、ホストファミリーが考えてくれた予定を消化するだけで何も出来ないまま終わってしまいます。そこで、持参した日本文化を紹介する本を見ながら着物や季節の行事を説明したり、生け花を披露することに挑戦してみました。生け花は未熟な作品でしたが、喜んで居間に飾ってくれました。自らスーパーで花を買い、ホストファミリーの前で実演したことで私の熱意や気持ちが伝わったのだと思います。また、大磯から一緒に行った仲間と日本料理を作って、皆さんに食べていただきました。

そうすることで、お互いの距離が縮まり、打ち解けることが出来ました。受身ではなく自ら発信し、積極的に行動する力が必要なのだと改めて実感しました。

これからも自らを磨き、いろいろな国で友情の輪を広げたいと思います。

## 「American サイズ」

坂本 和佳乃

今回の姉妹都市派遣による派遣で学んだことは沢山あります。その中で、渡米の目的の一つだったアメリカの日常を見てアメリカという国を肌で感じるということについて皆さんにお伝えしたいと思います。

私はアメリカの日常を見るため、図書館・病院・レストラン・本屋さん・スーパーマーケット・・・などなど、色々な所に行きました。そのなかで、私はアメリカにある物のサイズが日本とは比べ物にならないと度々感じました。もちろん、食べ物や家の大きさにも驚きましたが、特に印象深かったことが二つあります。

一つはアメリカの芸術に対する裾野の広さです。有名な楽団などを呼んで開催される破格の音楽祭や、JAZZ フェスティバル。それに、高校生が演じる本格的なミュージカル等です。そうしてもう一つ印象に残ったのは病院の大きさです。まるで一つの科が日本の総合病院みたいに大きなビルなのです。中はとても清潔感溢れる内装となっていてゆったりとした空気が流れていました。この事はいくら本を読んだりしても分からないので、実際に見学させていただいたお陰です。

このような素晴らしい機会を与えて下さった皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。